# 夕焼け灯台の秘密

志茂文彦

© 志茂文彦／京都アニメーション

© 志茂文彦／京都アニメーション

イラスト／門脇未来

デザイン／京都アニメーション商品開発部

# 第一章　灯台の子どもたち

あ、ゆうれいさんだ。
と、そのひとを見て、美夕は思った。
美夕の知らないひとは、ゆうれいさんしかありえない。
だってこの世界に生きている人間は、美夕たちだけなんだから。
「ちょっと聞いていいかな」
ゆうれいさんが美夕に声をかけた。
びっくりした。
今までにも、ゆうれいさんを見たことは何度かある。
でも、美夕に話しかけてくるゆうれいさんは、初めてだ。
ゆうれいさんは、はきはきと言葉をつづけた。
「ここって夕焼け灯台公園だよね。私さ、ここの管理してる人の親戚なんだ。でもこの公園、広いから迷っちゃってさ。管理人室っていうのかな、ここに住んでる人のうちって、どこだかわかる？　知ってたら教えて。私のおばさん、そこで暮らしてるはずなのよ」



……。
いっぺんにいろいろいわれたので、頭がこんがらがってしまった。
ゆうれいって、こんなに元気に早口でしゃべるものなんだ。
しんはっけんだ。
相手がゆうれいさんでも、困っていることがあるなら親切にしてあげたい。
でも今は、なにから教えてあげたらいいかわかんない。
もういちど、ゆっくりいってもらえないだろうか。
そう思って、じぃーっと、ゆうれいさんを見つめる。
すると、ゆうれいさんは、とまどったみたいな顔をした。
「えっと、ね」
ゆうれいさんが、美夕の前にしゃがんだ。顔の高さが同じになる。
きれいなひとだ。
短い、はねた髪が、夕方のオレンジ色の光にきらきら輝いている。
「人がいっぱいいるのって、どっちかわかる？」
ひとが、いっぱいいるところ？
朝絵（あさえ）とまひるがいる場所のことだろうか。
それならすぐわかる。

© 志茂文彦／京都アニメーション

「あっち」
指さした。
「そっか、ありがと」
ゆうれいさんはにっこり笑って立ちあがった。
ぬっ、と、急に背が大きくなったみたいで、おもしろい。
もういっぺんやってくれないかな。
でもゆうれいさんは、そんな美夕の気持ちはわからなかったみたいで、すぐに歩きだした。
肩にリュックをひっかけて、すた、すた、すた。
気持ちいい足音で地面を踏んでいく。
かっこよくて、きれいで、見とれてしまう。
「ゆうれいさん」
呼びかけてみる。
「え？」
足を止めて、ゆうれいさんがふりむいた。
「何、幽霊さん？　私のこと？」
美夕は答えず、じぃーっと見つめる。
ゆうれいさんは、どうしたらいいか、こまっているようだったが――。

© 志茂文彦／京都アニメーション

ちょっと笑うと、また美夕に背をむけて、歩いていった。
美夕は、今度はだまって見おくる。
すごい。
ゆうれいさんとおしゃべりしちゃった。
あとで朝絵とまひるに話してあげよう。
きっと二人もびっくりするだろう……。

## 一

「変な子だったなあ」
せかせかと足早に歩きながら、大平水穂（おおひらみずほ）はつぶやいた。
もっとも、水穂自身も、変な子だとよくいわれる。ほかにも色気がないとか、行儀が悪いとか、言葉づかいがなってないとか、いろいろと。
振り返ってみたが、もう今の女の子は木立（こだち）の向こうだ。
十歳ぐらいだろうか。可愛らしい子だった。
柔らかそうな髪の毛が、夕暮れの風にふわふわそよぎ、大きな透きとおった瞳が印象的だった。ちょっと無口で表情に乏しかったが。



水穂のことを、「幽霊さん」と呼んでいた。あれはなんだったんだろう。
何かの遊びだろうか。空想好きな女の子なのかもしれない。
あんなところで何をしていたんだろう。この灯台公園に、家族とドライブにでも来ているのだろうか。でも、ここは秀美（ひでみ）おばさんが買った私有地のはずだが――。
かぶりを振って、リュックをかつぎ直した。
「他人のこと気にしてる場合じゃないか」
今は自分自身が、非常に、極めて、大変に、不安定な立場なのだから。
「ここかあ！　なーんだ、こんなとこにあったんだ」
木々が途切れて視界が開け、大きな真っ白い灯台が、どーんと目の前にあらわれた。
西日が、灯台の白壁を朱色に染めている。
そして灯台の向こうには、夕暮れの海が広がっている。
「おおーっ！」
水穂は歓声をあげた。ここで「わあー」とか「きゃー」でなく、「おー」と叫ぶあたりが、友人たちから色気がないとかアニキ体質とかいわれるゆえんだろう。
水平線が真っ赤だ。
空は西から東に向かって、赤からオレンジ色へ、そして藍色へと、あざやかなグラデーションを描いている。明るい西の空に、さらに明るく星がひとつ輝いている。

© 志茂文彦／京都アニメーション

そして、海！

こんな色の海を見るのは初めてだ。

まるで海面いっぱいに蜂蜜を溶かしたようだ。波が金色の光線をきらきらとはじいている。水平線に接しようとしている太陽。その周りに万華鏡のように光が踊っている。

きらめき、めくるめくような、光、光、光。

この世の光景とは思えない美しさだ。

本当に別世界にでも来てしまったような気がする。異次元とか異空間とか異世界とか、そんな場所に……。

海風が、水穂のぼさぼさ気味の短い髪をなでる。塩からい海の香りが鼻をつく。

「はーっ、気持ちいい……」

おっと、のんびり深呼吸などしている余裕はない。

灯台の隣には、二階建ての建物が、寄り添うように建っていた。

瓦屋根、白い壁。古い大きなお屋敷だ。表札はないが、ここが秀美おばさんの家のはずだ。

二本の大きな木に挟まれるように玄関があった。古い木の扉。インターホンは新しい。

「問題は、ここからなんだよね……」

今日こうして水穂が来ることを、おばさんは知らない。事前に連絡したかったが、電話番号もメルアドもわからなかったのだ。



もしおばさんが不在だったら、水穂はたちまち、今夜の宿に困ってしまう。

携帯電話のカメラを鏡代わりに、髪を整える。ほっておくとあちこち勝手な方向に跳ねるくせっ毛を、カチューシャで押さえこむ。

最後におばさんに会ったのは中一の時だ。今、水穂は高一。三年ぶりの再会だ。

久しぶりなのだから第一印象は大切だ。愛想笑いは苦手だが、そんなことをいってはいられない。

笑顔笑顔。可愛く笑顔。

にこっ。

笑顔をキープして、インターホンのチャイムを押す。ほどなく返事があった。

「どちらさま、ですか？」

インターホンから控え目な声が聞こえてきた。知らない声だ。

ちょっとどぎまぎしつつ、精一杯、明るいさわやか少女っぽく答えた。

「あのっ。私、大平水穂っていいますっ。大平秀美さんの親戚なんですけどっ、秀美おばさん、いらっしゃいますかっ？」

「秀美さんのご親戚……？」

かちり、と錠をはずす音がして、古めかしい木の扉が、そっと細く開いた。

あらわれた顔を見て驚いた。それは、またしても小学生ぐらいの女の子だったのだ。十二歳

© 志茂文彦／京都アニメーション

ぐらいだろうか。さっき道をたずねた子より、少し歳が上のようだ。
黒いワンピースを着て、漆黒の髪を長く伸ばしている。愛らしい水色のリボンが黒い服によく映え、シックで上品な雰囲気を添えている。
柔和な顔立ちの中に、かしこそうな瞳がきらめいている。ちょっと息をのむほどに可愛い。
水穂はせっかく作ったさわやか笑顔を消し去って、目をぱちくりさせた。
なぜこの家に、こんな子どもがいるのだろう。おばさんは一人暮らしのはずなのに。
「あの……あんた——あなた、誰？」
「私は朝絵と申します。はじめまして」
女の子はきちんと手をそろえ、行儀よく頭を下げた。声は甘く柔らかい。
「あっ。ど、どうも」
「秀美さんは留守なんです。ご親戚のかたがいらっしゃるという話は聞いておりませんが、どのようなご用件でしょうか」
警戒的な、でもしっかりした口調。水穂の百倍くらい、言葉づかいがちゃんとしている。
「いや、あのねっ」
水穂は荷物を肩に掛け直し、さわやかでフレンドリーなスマイルを復活させた。
「ちょっと遊びにきたの。ほら、今、ゴールデンウィークでしょ。高校も休みだしさ。連絡なしにいきなり顔見せて、おばさんのことびっくりさせてやろうかなーって思って」



「はあ……」
朝絵は困ったように眉根にしわを寄せた。
「ね、あなた誰なの。どうしてここにいるの。秀美おばさんって独身だし、子どもはいないはずなんだけど」
「ええと、ちょっと事情があって——今、ここに居させてもらってるんです」
「一緒に暮らしてるってこと？　おばさんと？　なんで？」
朝絵は、水穂の問をはぐらかすように視線をそらした。
「困りました。秀美さんは夜まで帰ってこないんです。明日、あらためてもう一度、いらしていただくほうが——」
「ちょちょちょ、ちょっと待って！」
今にも扉を閉めそうな朝絵の様子に、水穂は慌てた。
「私んち東京でさ、今からだともう電車がないの。ホテルとか旅館だとお金かかるし、秀美おばさんが帰ってくるまで、中で待たせてもらえないかな」
「でも——」
「私とおばさん、仲いいから、きっと泊めてくれるはずなのよ。ねっ。いきなり押しかけて迷惑だとは思うけどさ。お願いっ。おばさんが戻るまでここに居させて。この通りっ」
拝むように手を合わせる。子ども相手に情けない気もするが、ここで追い返されるわけには

© 志茂文彦／京都アニメーション

いかないのだ。なんとしても。

「――――」

朝絵はしばらく考えていたが、やがて、あきらめたようにうなずいてくれた。

「中へどうぞ」

水穂はほーっと息をついた。よかった。ここから締めだされたら、野宿するしかなかった。

何しろ今の水穂には、ほかに行き場がないのだ。

親と大ゲンカをして家出中なのだから。

## 二

建物は外見ばかりでなく、中も古めかしかった。床は板張りで、木枠の窓にはネジ式の錠がついている。でも清掃が行き届き、広々として明るい。

「ずいぶん古い家なんだね」

パタ、パタ、パタ。スリッパを鳴らして歩きながら、朝絵にたずねる。朝絵は足音もつつましく、水穂みたいな音はたてない。

「明治時代に、灯台と一緒に建てられたものです。当時は、吏員退息所（りいんたいそくじょ）と呼ばれていたそうです」

「この灯台って、今は閉鎖されてるんでしょ。それを秀美おばさんが、周りの敷地ごと買いとったんだよね。おばさん、バイオの特許か何かでお金持ちだから」



「はい。私もそう聞いています」

歩きながら、水穂は探るように、朝絵の横顔をのぞきこんだ。

「私、ここにくるのは初めてなんだけどさ。おばさん、独り暮らしって聞いてたからびっくりしたよ。なんであなたみたいな子がここにいるの？　近所の子？　あ、もしかしてあなたたちもゴールデンウィークで遊びに来てるとか……」

「詳しいことは、秀美さんが帰ってからお聞きください」

朝絵の口調はどこまでもそっけない。

「――そうだ。一つ、絶対に守っていただきたいことがあります」

「ん？」

「これからご案内するお部屋から、なるべく出ないでいただきたいんです。お手洗いはやむをえませんが、万一、誰かの姿を見かけても、絶対に話しかけないでください」

「なんでそんな――ホラーマンガみたいな」

「その……この屋敷には、病気の子がいるんです。私の――妹です。人見知りする性格で、知らない人を見ると驚いてしまうので……」

「それって、もしかして十歳ぐらいの、あんまりしゃべらない子？」

朝絵の足が、ぴたりと止まった。

© 志茂文彦／京都アニメーション

「その通り、です、けど――」
ぎぎぎぎぎっ、と、人形みたいにぎこちなく、こわばった顔を水穂に向ける。
「なぜ、あなたが、それを……」
「さっき会ったから。ここにくる途中、林の中で――。わっ」
どん、と、いきなり朝絵が、体当たりするように水穂を壁に押しつけ、胸ぐらをつかんだ。
「な、何っ。どしたのっ」
「〜〜〜〜っ！」
朝絵は、たった今までの礼儀正しく取りすました表情とはうって変わり、目を大きく見開いて、声にならない怒りの声をあげ、水穂をにらんでいた。
「会っ、た？　あの子、に？　美夕に？　話を、したんですかっ？？？」
「う、うん。みゆちゃんていうの？　たぶんその子だと思う」
「なぜっ。どうしてっ！」
「どうしてって――道を教えてもらっただけだよ。何？　私、そんな悪いことしちゃった？」
「悪いことも何も！」
ぎゅっ、と、水穂の服をつかんだ小さな手に力がこもる。色白の肌は真っ赤に染まり、瞳に涙が浮かんでいる。
「これで……これで、何もかも台無しです！　あの子には――美夕には、絶対に！　外の人に



会わせてはいけなかったのに！」
「外の人に、会わせては、いけない？」
「そうです！　一体あなたは自分が何をしたか、わかっているんですかっ！」
「いや、あの、わかっているんですか、っていわれても」
「あの子は？　美夕は、あなたを見てどうしました！　何かいっていましたか」
「なんか、びっくりしてたみたいな……。そうだ、私のこと、幽霊とかなんとか」
「幽霊っ？」
はっ、と、朝絵がさらに目を大きく見開き、よろよろっと後ろにさがった。壁に手をついて身体を支える。水色のリボンが、朝絵のうろたえぶりを表すように、ひらひら揺れる。
「幽霊……。そうか、幽霊……！　美夕ならそう考えてもおかしくない……。この世界に、ほかに人間がいることを知らないんだから、会う人を幽霊だと思うのが当たり前だわ……」
「ちょ、ちょっと。なんの話、それ」
しかし朝絵の耳に、水穂の声は届いていないようだった。
「幽霊、ということにすれば、なんとかごまかせるかもしれない。いいえ、もうこうなったら、そういうことにして押し通すしかないっ。それならまだ希望があるわ。幽霊……そうよ、幽霊だっていいはれば、なんとか……」
きっ、と朝絵が水穂を鋭い表情で見つめた。

© 志茂文彦／京都アニメーション

「水穂さん、とおっしゃいましたね」
「う、うん。大平水穂」
「あなたには、たった今から、幽霊になってもらいますっ！」

© 志茂文彦／京都アニメーション